

はじめに

元時代染付あるいは元青花、それは中国の元時代に景德鎮で生まれた陶磁器の一種である。様式化された製品が大量生産され、世界各地に流通したが、その起源と年代については今も論争が続く。古くて新しい課題であり、物の始まりを探る興味尽きないテーマの一つである。

元青花壺は鑑賞陶磁器として2005年に27,700,000ドル、今のレートなら33億円の高価格でロンドンのオークションを飾ったこともある。美術館に展示されるばかりでなく、遺跡発掘品は遺跡の年代推定や居住者層、当時の流通範囲、文化交流などを知る歴史資料として活用されている。

所有者が代わりながら、いまロンドン大学に所蔵される青花雲龍紋象耳大瓶は至正11年銘があることで世界の陶磁器のなかでも有名なものである。元青花の研究はここから始まる。トルコのトプカプ宮殿の台所に収納された元青花は、それを用いた研究で至正様式が元青花の代表例になり有名となった。いずれも半世紀以上前のことである。

2011年2月、金沢大学創基150周年記念シンポジウムとして「元代青花瓷—出現と継承—」を開催した。日本の研究者ばかりでなく、関係する中国や台湾の研究者も参加し、知的好奇心を共有した一日となった。

本書は半世紀以上にわたる研究上の展開をいくつかの視点から検討し、最新の研究を発表した当日の成果を中心に掲載している。日本や韓国、東南アジア、さらに欧米の陶磁器の基礎となった元青花について、陶磁器や歴史を好む読者に様々な視点から刺激を与えることになればと願う。

(編者・佐々木達夫)

目 次

はじめに

総論 元青花の誕生と継承———佐々木 達夫 5

第1部 元青花の誕生とその背景

ユーラシア遊牧文化における聖色「青」と「白」
———四日市 康博 33

元青花磁器覚書———謝 明良 49

景德鎮元青花の起源に関する在地的要因考———施 静菲 67

宋末元初 景德鎮の工房立地———水上 和則 97

近年の景德鎮における元青花研究から———関口 広次 117

元様式青花瓷はいつまで生産されたか———高島 裕之 135

至正様式青花磁器の文様構成———杉谷 香代子 147

第2部 元青花のアジア流通

フィリピン出土の元青花———田中 和彦 169

タイ出土の元青花———向井 互 195

トロウラン遺跡のベトナム産タイルと元青花の文様
—————坂井 隆 215

西アジアに流通した元青花—————佐々木 花江・佐々木 達夫 235

第3部 東北アジアの染付・青花誕生

朝鮮半島の初期青花—————吉良 文男 249

日本染付磁器誕生—————高島 裕之 261

有田皿山における藩窯の成立背景—————野上 建紀 277

唐青花研究の再思考—————劉 朝暉 291

あとがき 309

執筆者一覧 310